



イベント

中国の伝統的な端午の節を迎え、多くの見学者が歴史を学ぶために記念館を訪れた。このため、記念館は開館時間を延長し、「記憶の声」朗読活動を企画し、特別グループ専用の優先窓口を開設し、問い合わせ電話に迅速に対応してきた。連休の3日間、見学者は『ラーベ日記』を朗読し、歴史を振り返り、犠牲者を偲んだ。中国福建省から来た11歳の官景恒さんは「鉄兜をかぶって日記を書いているラーベさんの銅像を見た後、『ラーベの日記』の朗読に参加し、身の危険を顧みず中国難民を助けるために犠牲ってくれたラーベさんに感謝する。これから歴史を心に刻み、しっかり勉強する」と語った。



2023年12月13日夜、南京紫金草芸術団の児童合唱団60人余りが、オリジナル曲「隅に向かって伸びる紫金草」を歌った。この歌は果てしない悲しみを伝えると同時に、心強さと未来への期待をも聞く側に伝えたい。今年、南京紫金草芸術団児童合唱団は新メンバーを募集し、合唱を通して歴史を学び、小さな平和使者を培うことを目指している。



生存者の情報

南京大虐殺の生存者である高如琴さんが5月23日、90歳で亡くなった。高さんは1934年1月生まれ、当時、家族とともに城内で避難する途中、侵入してきた日本軍に小銃で撃たれ、高さんの手を繋いでいる祖母は胸に撃たれて、高さんのそばで即死し、母親の足が撃たれて負傷した。その後、生き残った家族と一緒に難民キャンプに入って避難した。



歴史記憶を受け継ぐ

カナダ時間の6月8日、トロント市内にあるアジア太平洋平和博物館(WongAvery ASIA PACIFIC PEACE MUSEUM)が正式にオープンした。同博物館では、アジア地域における第二次世界大戦の歴史を展示している。展示は「戦前」「日本の軍国主義と侵略」「大虐殺」「日本軍の性奴隷制度」「細菌戦と人体実験」「捕虜虐待および強制連行」「アジアの第二次世界大戦とカナダ」「日本の敗北」「戦後の正義」「記憶と反省の間」の10個のセクションで構成されている。第3セクションでは南京大虐殺に焦点を当てている。中国系カナダ人の王裕佳氏、劉美玲氏たちの20年来的努力によって、この博物館の設立を実現した。



見学者の声

6月21日の午後、南京出身の黄安慧さんとカリフォルニア大学バークレー校の哲学博士課程に在籍するミラン・モッセさんが一緒に記念館を訪れた。ミランさんは、南京大虐殺史実展を見学しながら、思わず涙を拭いていた。彼は「日本軍に刺され、流産した生存者の李秀英さんを見た時、言葉で表現できないほどの悲しい気持ちになった」と話した。ミランさんはまた、南京大虐殺の歴史はアメリカの歴史授業では学んだことなく、帰国したら記念館で見た史実を友人や家族に伝えたいと語った。今回、黄さんの案内で南京を散策したミランさんは「南京はとても美しく、とてもフレンドリーな街だ」と絶賛した。

